

Title	フランス語の接辞代名詞：語彙主義の観点から
Sub Title	Les affixes pronominaux en français : d'un point de vue lexicaliste
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.51 (2010.) ,p.1- 28
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20101018-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス語の接辞代名詞

——語彙主義の観点から——

喜 田 浩 平

1. はじめに

フランス語の人称代名詞の分布を語彙主義的観点から分析する可能性について論じてみたい。具体的には、HPSG (Head-Driven Phrase Structure Grammar¹⁾) の枠組みで進められた研究 Miller & Sag (1997) をとりあげ、その理論装置を概観し、提示されたデータ分析の妥当性を検証し、理論的帰結について触れることにする。とりわけ Sportiche (1996) が指摘する語彙主義的分析の弱点を Miller & Sag (1997) がどのように回避するのかという点を重視する。

Miller & Sag (1997) は Miller & Sag (1995) を発展させたものであるが、後者で導入された諸概念の無駄を省き、とりわけ無用の複雑化を招く語彙規則を排除することで理論的整合性を高め、より洗練された形で展開している。HPSG そのものは様々な修正や新たな提案によって進化し続けているが²⁾、この枠組みにおけるフランス語の人称代名詞に関する研究は、Miller & Sag

1) 概要は Pollard & Sag (1987) (1994)、Sag, Wasow & Bender (2003) 参照。フランス語で書かれた唯一の概説書は Abeillé (1993) である。なお、日本語では「主辞駆動句構造文法」、フランス語では la grammaire syntagmatique guidée par les têtes という訳語が定着している。

2) HPSG の最新の情報は、創始者の一人である Ivan A. Sag の個人サイト (<http://lingo.stanford.edu/sag/>) で入手できる。素性構造の記述における素性の種類や数、その相互関係などは頻繁に変化している。比較的最近のまとまった研究としては Ginzburg & Sag (2000) がある。近年では、「構文」(construction) の概念を取り入れた形で発展している。

(1997) が一種のスタンダードになっていると考えてよい。そのアイデアは Abeillé & Godard (1994) (1996) (2002)、Abeillé, Godard & Sag (1998) などで共有されている一方で、これを覆すような研究は発表されていないからである³⁾。

以下では、まず議論の背景を整理し、分析の対象となるデータを確認する。次に Miller & Sag (1997) の理論装置を概観し、その基本的な仕組みを見る。そしてデータが適切な形で分析できることを示す。しかも、素性構造記述を組み合わせることで、著者たちが明示的な形で指摘していない分布も正しく予測できることを示し、その有効性を明らかにする。

なお、後述のように Miller & Sag (1997) はフランス語の代名詞を「接辞」(affix) として取り扱っている。この用語法には、変形生成文法の枠組みで進められた「接語」(clitic) としての分析に対する批判が込められている。本稿でも「接辞」という表現を踏襲する。

2. 議論の背景

フランス語の接辞代名詞の文法理論を構築する場合、以下のようなデータがまず出発点になる。

- (1) a. Pierre lit ce livre.
b. Pierre le lit.
c. *Pierre lit le.
- (2) a. Pierre parle à Marie.
b. Pierre lui parle.
c. *Pierre parle lui.

前者がいわゆる直接目的、後者が間接目的の例である。いずれのケースでも、接辞を動詞の前に置く (1b) (2b) は適格な文であるが、動詞の後ろに置く

3) Abeillé (2008) はフランス語の HPSG 分析の比較的新しい成果であるが、そこでも Miller & Sag (1997) に重要な位置づけが与えられている。

(1c) (2c) は不適格である。

このような分布を一般化する場合、一見すると以下の (3) で十分であるように思われる。

(3) 接辞代名詞の位置

接辞代名詞は、それが項となるような述語の前に位置する。

(1b) では、接辞 *le* は動詞 *lit* の項であり、その前に位置している。また (2b) では接辞 *lui* は動詞 *parle* の項であり、その前に位置している。

(3) は (1) や (2) のような単独の動詞の例だけではなく、以下のような例にも適用できるため、妥当性があるように思われる。

- (4) a. Pierre veut lire ce livre.
 b. Pierre veut le lire.
 c. *Pierre le veut lire.
- (5) a. Pierre essaie de lire ce livre.
 b. Pierre essaie de le lire.
 c. *Pierre l'essaie de lire.
- (6) a. Pierre recommande à Marie de lire ce livre.
 b. Pierre recommande à Marie de le lire.
 c. *Pierre le recommande à Marie de lire.

(4) は助動詞的な *vouloir* と不定詞補語の組み合わせの例である。(4b) が示すように、接辞 *le* はそれが項となる動詞 *lire* の直前に位置するのが正しい。(4c) のように *veut* の前に置く場合、17 世紀のフランス語ならば許容されたかもしれないが、現代のフランス語では不適格となる。また、*vouloir* に限らず、*pouvoir*、*devoir*、*aller* などでも同様の分布を示す。(5) と (6) でも事情はほぼ同じで、接辞は *lire* に前置されるのが正しく、*essayer* および *recommander* に前置すると不適格となる。

ところが、(3) のような一般化が成り立たないデータが存在する。

- (7) 時制助動詞 avoir, être
- a. Pierre a lu ce livre.
 - b. Pierre l'a lu.
 - c. *Pierre a le lu.
- (8) être + 属詞
- a. Pierre est fidèle à Marie.
 - b. Pierre lui est fidèle.
 - c. *Pierre est lui fidèle.
- (9) 使役動詞 faire
- a. Pierre fait lire ce livre à ses enfants.
 - b. Pierre le fait lire à ses enfants.
 - c. *Pierre fait le lire à ses enfants.

(7) は複合過去の例である。(3) が正しいならば、接辞を lu の前に置く (7c) が正しいと予測されるが、実際は不適格であり、適格なのは (7b) のように接辞が意味的にも統語的にも依存しない助動詞 avoir に前置される文である。(8) も同様に、接辞 lui は形容詞 fidèle の項であるにもかかわらず、その直前に置かれたケース (8c) は不適格で、直接的には項になっていない être に前置した (8b) が適格となる。(9) でも、接辞は動詞 lire の項であるにもかかわらず、それに前置した (9c) は不適格、使役動詞 faire に前置した (9b) が適格となっている。

このような分布を根拠として、Sportiche (1996) は語彙主義的アプローチを退け、「移動」などの統語的操作によるアプローチを支持している。しかし一口に「語彙主義」といってもさまざまなアプローチが存在し、Sportiche が具体的にどのような「語彙主義」を念頭に置いているかは明らかではない。本稿でとりあげる Miller & Sag (1997) は非常に強い語彙主義を標榜するにもかかわらず、(7)(8)(9) のような分布も視野に入れ、フ

フランス語の接辞の文法理論を構築している。

3. 語彙主義的分析

Miller & Sag (1997) が考える語彙主義は、以下のような点を前提にしている (p.581)。

- ・語構造の諸原理は、統語構造を支配する原理からは独立している。
- ・統語操作は語の内部構造に影響を与えない。

また同論文は、フランス語の代名詞は形態論的に処理されるべき「接辞」(afix) とみなすべきであると主張する。著者らは多数の根拠をあげているが、その議論は本稿の趣旨ではないので割愛する。

フランス語の代名詞を接辞とみなすことは、それが統語レベルではなくレキシコンで形成されることを含意する。また、上記の前提から、フランス語の代名詞は統語操作の対象とはならない、ということが帰結する。この点は、フランス語の代名詞を統語操作の対象となる「接語」(clitic) として処理する生成文法の伝統⁴⁾と一線を画す。

以下、Miller & Sag (1997) の提示する分析を外観する。特に断りのない限り、素性構造記述の例などは同論文からの引用である。

3.1 屈折語のタイプ階層

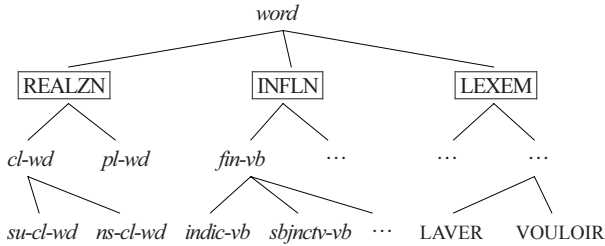
動詞の様々な屈折形が、以下のような3つのタイプを中心に体系的に構造化されているものと仮定する。

- ・LEXEM (lexeme type) : 語彙素の統語的・意味的性質に関する情報
- ・INFLN (inflectional type) : 時制、法、人称などに対応する屈折形に関する情報
- ・REALZN (clitic-realization type) : 動詞の項が具現化する形態についての情報、すなわち語や句として具現化するのかそれとも接辞として具現化するのかという側面についての情報

4) Miller & Sag (1997) によると、この伝統は Chomsky (1955) から Pollock (1989) を経て綿々と続いている。

これが、以下のような階層構造をなして相互に関連し合っていると考える。

(10)



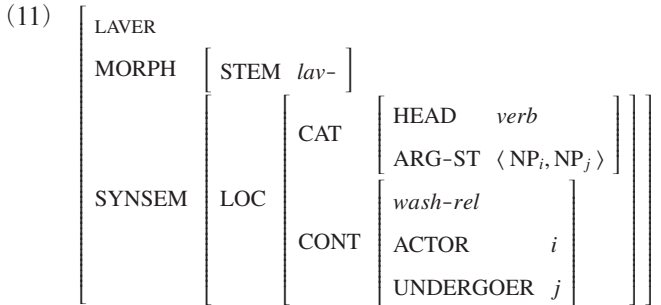
LEXEM は様々に分岐し、個別の語彙素の記述に結び付く（語彙素は大文字で表記する）。INFLN は、まず大きな分岐点として *fin-vb* (*finite-verb*) に至り、そこからさらに *indic-vb* (*indicative-verb*)、*sbjctv-vb* (*subjunctive-verb*) などに分岐する。ここでは省略されているが、さらに人称や時制に対応した下位区分も可能である。REALZN はまず *cl-wd* (*cliticized-word*) と *pl-wd* (*plain-word*) に分岐する。前者は少なくとも 1 つの接辞を含むタイプである。後者は接辞を含まず、全ての項が語や句によって統語的に具現化するタイプである。*cl-wd* はさらに *su-cl-wd* (*subject-cliticized-word*) と *ns-cl-wd* (*nonsubject-cliticized-word*) に分岐する。ここでの *subject* / *nonsubject* とは、「主語が接辞として具現化するかどうか」という点に関する区別である。

具体的な個々の語は、LEXEM からの情報、INFLN からの情報、REALZN の情報を統合したものと特徴づけられる。例えば語彙素 LAVER が、*indic-vb* という屈折形をとり、その項が *su-cl-wd* として具現化すると、*il le lave* という適格な文が形成される。

3 つのタイプはいずれも、動的な規則ではなく、静的な「制約」(*constraint*) として表現される。制約の表現には、素性とその値を組み合わせたマトリックスが用いられる。

3.2 語彙素

LEXEM タイプは、語彙素の形態的、統語的、意味的特徴の記述に対応する。いわゆる「語彙記載項」(lexical entry)に近いものである。LAVER を例にとると、以下のような記述が考えられる。



MORPH(OLOGY) は形態論的情報に関する素性である。SYNSEM (= SYNTAX and SEMANTICS) は統語情報と意味情報を統合した素性である。LOC(AL) は「局所的」な情報を提供する素性であり、その中心になるのは CAT(EGORY) と CONT(ENT) である。前者は範疇に関する情報を提供する。その中の HEAD が主辞に関する情報、ARG (UMENT) -ST (RUCTURE) が項構造に関する情報である。CONT が意味情報を記述する。

(11) の LAVER の記述に即して補足すると、語根が *lav-*、品詞は動詞、項構造としては2つの NP をとり、一方が意味論的 ACTOR に、他方が UNDERGOER に対応し、両者が *wash-rel(ation)* という関係にあることが示されている。

3.3 屈折形

INFLN タイプは動詞の屈折形に関する制約を指定する。(10) のタイプ階層では *indic-vb*、*subjctv-vb* とのみ表記されている(すなわち動詞の法のみ指定されている)が、実際は時制、人称、数などに応じてさらに下位区分

される。

具体例として、「直説法現在 3 人称単数」という制約を見てみよう⁵⁾。

(12) *3sg-pres-indic-vb* ⇒

MORPH	I-FORM F_{3spi} ($\boxed{\text{I}}$)								
	STEM $\boxed{\text{I}}$								
SYNSEM	LOC	CAT	HEAD	<i>verb</i>	$\boxed{\text{I}}$	$\boxed{\text{I}}$	$\boxed{\text{I}}$	$\boxed{\text{I}}$	$\boxed{\text{I}}$
		ARG-ST	VFORM	<i>indic</i>					
		CONT	ARG-ST	$\langle \text{NP}[3sg], \dots \rangle$					
			LOC	$[\dots]$					

MORPH 素性の中に I(NFLECTIONAL)-FORM が導入される。その値は F_{3spi} という関数であるが、これは STEM の値に対応する $\boxed{\text{I}}$ を適切な「直説法現在 3 人称単数」の屈折形に写像するものである。HEAD 素性に V(ERB)FORM が導入され、その値が直説法であることがわかる。項構造を見ると、第 1 の項が 3 人称単数の NP と指定されている。意味論的には、LOC(ATION) が追加されている。

さて、このように表現される制約が実際にどのような形で適用されるのか見てみよう。例えば、「語彙素 LAVER の直説法現在 3 人称単数の屈折形」は、LAVER の語彙素記述である (11) と「直説法現在 3 人称単数」の制約である (12) を統合したものに対応する。以下がその記述である⁶⁾。

-
- 5) この制約について Miller & Sag (1997) は言及していないので、Abeillé, Godard & Sag (1998) から補うことにした。ただし原著では ARG-ST は LOC の内部に CAT および CONT と同列に並べられているが、Miller & Sag (1997) の表記法を尊重して若干の修正を加え、CAT の内部に HEAD と並べる形にしてある。
- 6) Abeillé, Godard & Sag (1998) からの引用。ただし Miller & Sag (1997) の表記法と統一するため、TRANS 素性を省略し、ARG-ST の位置を修正した。

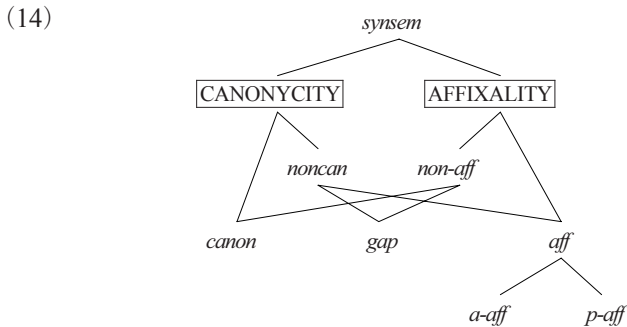
(13)

LAVER & 3sg-pres-indic-vb					
MORPH	I-FORM <i>lave</i>				
	STEM <i>lav-</i>				
SYNSEM	LOC	CAT	HEAD	[<i>verb</i>]
				[VFORM <i>indic</i>]]
			ARG-ST	⟨ NP[3sg] _i , NP _j ⟩	
	CONT			[<i>wash-rel</i>	
				ACTOR <i>i</i>	
			UNDERGOER <i>j</i>		
			LOC [...]		

上述の関数 F_{3spi} の働きにより、I-FORM が適切な値をとっていることに注目しよう。また、項構造リストの第1の項に 3sg という情報が付け加えられている点も重要である。

3.4 具現化

REALZN タイプは、動詞の項の具現化に関する制約を指定する。まずその前提として、synsem の新たなタイプ階層が導入される。



まず重要なのが、*canon(ical)* と *noncan(onical)* の区別である。前者は主辞

を持つ語または句として具現化する項に対応するタイプである。後者は語または句として具現化しない項に対応するタイプである。これはさらに *gap* タイプと *aff(ixal)* タイプに下位区分される。*gap* タイプに対応するのは、例えば *wh* 疑問文や関係節で抜き出される項である。*canon* と *gap* は接辞化には関与しないので、*non-aff(ixal)* タイプのサブタイプである。また *aff* タイプに対応する項は、接辞として具現化する。*aff* タイプはさらに人称代名詞的接辞 (*personal pronominal affix*) に対応する *p-aff* タイプと、再帰代名詞などの照応的接辞 (*anaphoric affix*) に対応する *a-aff* タイプに下位区分される。

上記 (10) で示したタイプ階層で見たように、*REALZN* はまず *cl-wd* と *pl-wd* に下位区分される。*pl-wd* タイプとは、主語と補語が形態論的な接辞ではなく統語論的な語や句 (すなわち *canon* タイプ) によって具現化するものである。これは以下のような制約としてまとめられる。

$$(15) \quad pl-wd \Rightarrow \left[\begin{array}{l} \text{MORPH} \\ \text{SYNSEM} \end{array} \left[\begin{array}{l} \text{FORM} \quad \boxed{0} \\ \text{I-FORM} \quad \boxed{0} \\ \text{LOC|CAT} \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} \text{VAL} \\ \text{ARG-ST} \end{array} \left[\begin{array}{l} \text{SUBJ} \quad \langle \boxed{2} \rangle \\ \text{COMPS} \quad \boxed{3} \end{array} \right] \right] \oplus \boxed{3} \right]$$

FORM は項が実際に具現化した際の動詞の全体的形態である。I-FORM は動詞の屈折形である。*pl-wd* は接辞を含まないため、両者は同じ形になる (タグ $\boxed{0}$ がそのような同一性を示している)。VAL(ENCE) は結合価に関する素性で、SUBJ(ECT) と COMP(LEMENT)S 素性に分割される。両者の値は主語あるいは補語として必要な項に関する情報を指定する。当該の語が主語または補語と実際に結び付くと、SUBJ と COMPS の値は空になる (この状態を「飽和」(saturated) と呼ぶ)。(15) では、SUBJ 素性の値は要素が一つだけのリストとして指定されている ($\langle \rangle$ がリストを示し、 $\boxed{2}$ がその要素である)。COMPS 素性の値は任意のリスト $\boxed{3}$ である。両者を連結

したものが、そのまま項構造リストに付加される（⊕はそのような結合を示す記号である）。

語彙素 LAVER が「直説法現在 3 人称単数」という制約と *pl-wd* の制約を受けると、以下のようになる⁷⁾。

(16)

<i>pl-wd</i> & LAVER & 3sg-pres-indic-vb																						
MORPH	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">FORM</td><td style="padding: 2px;"><i>lave</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">I-FORM</td><td style="padding: 2px;"><i>lave</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">STEM</td><td style="padding: 2px;"><i>lav-</i></td></tr> </table>	FORM	<i>lave</i>	I-FORM	<i>lave</i>	STEM	<i>lav-</i>															
FORM	<i>lave</i>																					
I-FORM	<i>lave</i>																					
STEM	<i>lav-</i>																					
SYNSEM	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">LOC</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">HEAD</td><td style="padding: 2px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">VFORM</td><td style="padding: 2px;"><i>indic</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>2</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ARG-ST</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>NP[3sg]_i, <u>2</u>NP_j⟩</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">CONT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;"><i>wash-rel</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ACTOR</td><td style="padding: 2px;"><i>i</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">UNDERGOER</td><td style="padding: 2px;"><i>j</i></td></tr> </table> </td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	LOC	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">HEAD</td><td style="padding: 2px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">VFORM</td><td style="padding: 2px;"><i>indic</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>2</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ARG-ST</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>NP[3sg]_i, <u>2</u>NP_j⟩</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">CONT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;"><i>wash-rel</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ACTOR</td><td style="padding: 2px;"><i>i</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">UNDERGOER</td><td style="padding: 2px;"><i>j</i></td></tr> </table> </td> </tr> </table>	CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">HEAD</td><td style="padding: 2px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">VFORM</td><td style="padding: 2px;"><i>indic</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>2</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ARG-ST</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>NP[3sg]_i, <u>2</u>NP_j⟩</td></tr> </table>	HEAD	<i>verb</i>	VFORM	<i>indic</i>	SUBJ	⟨ <u>1</u> ⟩	COMPS	⟨ <u>2</u> ⟩	ARG-ST	⟨ <u>1</u> NP[3sg] _i , <u>2</u> NP _j ⟩	CONT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;"><i>wash-rel</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ACTOR</td><td style="padding: 2px;"><i>i</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">UNDERGOER</td><td style="padding: 2px;"><i>j</i></td></tr> </table>	<i>wash-rel</i>	ACTOR	<i>i</i>	UNDERGOER	<i>j</i>
LOC	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">HEAD</td><td style="padding: 2px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">VFORM</td><td style="padding: 2px;"><i>indic</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>2</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ARG-ST</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>NP[3sg]_i, <u>2</u>NP_j⟩</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">CONT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;"><i>wash-rel</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ACTOR</td><td style="padding: 2px;"><i>i</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">UNDERGOER</td><td style="padding: 2px;"><i>j</i></td></tr> </table> </td> </tr> </table>	CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">HEAD</td><td style="padding: 2px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">VFORM</td><td style="padding: 2px;"><i>indic</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>2</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ARG-ST</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>NP[3sg]_i, <u>2</u>NP_j⟩</td></tr> </table>	HEAD	<i>verb</i>	VFORM	<i>indic</i>	SUBJ	⟨ <u>1</u> ⟩	COMPS	⟨ <u>2</u> ⟩	ARG-ST	⟨ <u>1</u> NP[3sg] _i , <u>2</u> NP _j ⟩	CONT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;"><i>wash-rel</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ACTOR</td><td style="padding: 2px;"><i>i</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">UNDERGOER</td><td style="padding: 2px;"><i>j</i></td></tr> </table>	<i>wash-rel</i>	ACTOR	<i>i</i>	UNDERGOER	<i>j</i>		
CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">HEAD</td><td style="padding: 2px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">VFORM</td><td style="padding: 2px;"><i>indic</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>2</u>⟩</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ARG-ST</td><td style="padding: 2px;">⟨<u>1</u>NP[3sg]_i, <u>2</u>NP_j⟩</td></tr> </table>	HEAD	<i>verb</i>	VFORM	<i>indic</i>	SUBJ	⟨ <u>1</u> ⟩	COMPS	⟨ <u>2</u> ⟩	ARG-ST	⟨ <u>1</u> NP[3sg] _i , <u>2</u> NP _j ⟩											
HEAD	<i>verb</i>																					
VFORM	<i>indic</i>																					
SUBJ	⟨ <u>1</u> ⟩																					
COMPS	⟨ <u>2</u> ⟩																					
ARG-ST	⟨ <u>1</u> NP[3sg] _i , <u>2</u> NP _j ⟩																					
CONT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;"><i>wash-rel</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">ACTOR</td><td style="padding: 2px;"><i>i</i></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">UNDERGOER</td><td style="padding: 2px;"><i>j</i></td></tr> </table>	<i>wash-rel</i>	ACTOR	<i>i</i>	UNDERGOER	<i>j</i>																
<i>wash-rel</i>																						
ACTOR	<i>i</i>																					
UNDERGOER	<i>j</i>																					

次に *cl-wd* であるが、これは項のうち少なくとも 1 つが接辞として具現化するタイプである。その制約は以下のように記述される。

(17)

<i>cl-wd</i> ⇒	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">MORPH</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">FORM</td><td style="padding: 2px;">$F_{PRAF}(\underline{0}, \dots)$</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">I-FORM</td><td style="padding: 2px;"><u>0</u></td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">SYNSEM</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">LOC CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">HEAD</td> <td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">VAL</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;"><u>2</u>⊕<u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)</td> </tr> </table> </td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	MORPH	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">FORM</td><td style="padding: 2px;">$F_{PRAF}(\underline{0}, \dots)$</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">I-FORM</td><td style="padding: 2px;"><u>0</u></td></tr> </table>	FORM	$F_{PRAF}(\underline{0}, \dots)$	I-FORM	<u>0</u>	SYNSEM	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">LOC CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">HEAD</td> <td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">VAL</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;"><u>2</u>⊕<u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	LOC CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">HEAD</td> <td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">VAL</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;"><u>2</u>⊕<u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)</td> </tr> </table>	HEAD	<i>verb</i>	VAL	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table>	SUBJ	<u>2</u>	COMPS	<u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)	ARG-ST	<u>2</u> ⊕ <u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)
MORPH	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">FORM</td><td style="padding: 2px;">$F_{PRAF}(\underline{0}, \dots)$</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">I-FORM</td><td style="padding: 2px;"><u>0</u></td></tr> </table>	FORM	$F_{PRAF}(\underline{0}, \dots)$	I-FORM	<u>0</u>																
FORM	$F_{PRAF}(\underline{0}, \dots)$																				
I-FORM	<u>0</u>																				
SYNSEM	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">LOC CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">HEAD</td> <td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">VAL</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;"><u>2</u>⊕<u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	LOC CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">HEAD</td> <td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">VAL</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;"><u>2</u>⊕<u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)</td> </tr> </table>	HEAD	<i>verb</i>	VAL	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table>	SUBJ	<u>2</u>	COMPS	<u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)	ARG-ST	<u>2</u> ⊕ <u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)								
LOC CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">HEAD</td> <td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">VAL</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px; vertical-align: middle;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;"><u>2</u>⊕<u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)</td> </tr> </table>	HEAD	<i>verb</i>	VAL	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table>	SUBJ	<u>2</u>	COMPS	<u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)	ARG-ST	<u>2</u> ⊕ <u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)										
HEAD	<i>verb</i>																				
VAL	<table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">SUBJ</td><td style="padding: 2px;"><u>2</u></td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">COMPS</td><td style="padding: 2px;"><u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)</td></tr> </table>	SUBJ	<u>2</u>	COMPS	<u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)																
SUBJ	<u>2</u>																				
COMPS	<u>3</u>]ist(<i>non-aff</i>)																				
ARG-ST	<u>2</u> ⊕ <u>3</u> ○ nelist(<i>aff</i>)																				

7) Abeillé, Godard & Sag (1998) からの引用。ただし TRANS を省略し、HEAD の値を簡略化し、VAL を追加した。

FORM 素性の値として導入される関数 F_{PRAF} については後述する。SUBJ 素性の値は任意のリスト②である。COMPS 素性の値も同じくリスト③であるが、list (*non-aff*) という表記は「*non-aff* タイプの要素を持つリスト」を意味する。後述のように項が *aff* タイプとして具現化するのであればこのリストから削除されるため、このリストに残る項は必然的に *non-aff* タイプとなる。SUBJ リストと COMPS リストが結合し、ARG-ST リストになる。ARG-ST リストの要素で *aff* タイプとして具現化するものがあれば、SUBJ リストまたは COMPS リストから削除される。そのような操作を示すのが○である。また、nelist (*aff*) という表記は、「*aff* タイプの要素を持つ、空でないリスト (nonempty list)」を意味する。この指定は、「*cl-wd* は定義上、接辞を少なくとも 1 つは含む」という事実に対応している。

関数 F_{PRAF} は、屈折形と主辞に関する情報から、接辞を含む適切な形態を導き出すものである。X を I-FORM 素性の値、Y を HEAD 素性の値（とりわけ VFORM 素性とその値）とすると、次のように定義される⁸⁾。

- (18) $F_{PRAF}(X, Y) =$
- a. X, if $Y = [\text{VFORM } \textit{past-p}]$
 - b. $X + [\textit{encl-fm}]$, if $Y = [\text{VFORM } \textit{imp}]$
 - c. $[\textit{procl-fm}] + X$, otherwise.

(18a) は、「動詞の形態が過去分詞 (*past participle*) である場合、FORM の値は X と同一」ということを意味する。つまり接辞は付加されない。この点は、後で時制助動詞と接辞の関係を論じる際に重要になってくる。(18b) は、「動詞の形態が命令形 (*imperative*) の場合、FORM の値は X に適切な前接的形式 (*enclitic-form*) を付加したもの」を意味する。(18c) は、「それ以外の場合、FORM の値は X に適切な後接的形式 (*proclitic-form*) を付加したもの」を意味する。

8) 本稿の論述の便宜上、Miller & Sag (1997) の表記を少し修正した。Abeillé, Godard & Sag (1998) で提示されているものにより近いが、同一ではない。

上述のように、*cl-wd* タイプは *su-cl-wd* と *ns-cl-wd* に下位区分される。それぞれに課される制約は以下の通りである。

$$(19) \quad \begin{array}{l} su-cl-wd \Rightarrow \left[\begin{array}{l} \text{SYNSEM|LOC|CAT} \left[\begin{array}{l} \text{VAL|SUBJ} \langle \quad \rangle \\ \text{ARG-ST} \langle [aff, nom], \dots \rangle \end{array} \right] \end{array} \right] \\ ns-cl-wd \Rightarrow \left[\begin{array}{l} \text{SYNSEM|LOC|CAT} \left[\begin{array}{l} \text{VAL|SUBJ} \langle \boxed{\quad} \rangle \\ \text{ARG-ST} \langle \boxed{\quad}, \dots \rangle \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array}$$

両者の違いは、主語が接辞として具現化するか否か、という点にある。*su-cl-wd* は主語が接辞として具現化するタイプである。従って、SUBJ リストは空になり、そのかわり ARG-ST リストの最初の項が主格 (*nominative*) の *aff* タイプという指定を受ける。*ns-cl-wd* は主語が接辞として具現化しないタイプである。そのため、SUBJ リストに要素 $\boxed{\quad}$ が指定されており、*gap* または *canon* として具現化する。

語彙素 LAVER に「直説法現在 3 人称単数」という制約が課され、さらに *su-cl-wd* という制約が課されると、以下ようになる⁹⁾。*(su-cl-wd* は *cl-wd* のサブタイプなので、上記 (17) の制約も自動的に継承される。また、主語は 3 人称単数男性、補語は 3 人称複数と仮定してある。)

9) Abeillé, Godard & Sag (1998) からの引用。HEAD の値を簡略化し、VAL を追加した。

(20)

		<i>su-cl-wd</i> & LAVER & <i>3sg-pres-indic-vb</i>			
MORPH	FORM	<i>il-le-lave</i>			
		<i>lave</i>			
	STEM	<i>lav-</i>			
SYNSEM	LOC	CAT	HEAD	<i>verb</i>	
			VFORM	<i>indic</i>	
		VAL	SUBJ	$\langle \quad \rangle$	
		COMPS	$\langle \quad \rangle$		
	ARG-ST	$\langle \text{NP}[p\text{-aff}, 3sg]_i, \text{NP}[p\text{-aff}]_j \rangle$			
	CONT	<i>wash-rel</i>			
	ACTOR	<i>i</i>			
	UNDERGOER	<i>j</i>			

語彙素 LAVER に「直説法現在 3 人称単数」の制約が課され、今度は *ns-cl-wd* 制約が課されると、以下のようなになる¹⁰⁾。(補語は 3 人称複数と仮定してある。)

(21)

		<i>ns-cl-wd</i> & LAVER & <i>3sg-pres-indic-vb</i>			
MORPH	FORM	<i>les-lave</i>			
SYNSEM	LOC	CAT	HEAD	<i>verb</i>	
			VFORM	<i>indic</i>	
		VAL	SUBJ	$\langle \boxed{\quad} \rangle$	
		COMPS	$\langle \quad \rangle$		
	ARG-ST	$\langle \boxed{\quad} \text{NP}[3sg]_i, \text{NP}[p\text{-ff}, \text{acc}, 3pl]_j \rangle$			
	CONT	<i>wash-rel</i>			
	ACTOR	<i>i</i>			
	UNDERGOER	<i>j</i>			

語彙素 DONNER を中心とした例を追加しておこう。個別の記述は省略し、

10) Miller & Sag (1997) では、ARG-ST の第 1 の項が $\boxed{\quad} \text{NP}[3p]$ と表記されているが、単純なミスだと思われるので修正した。

さまざまな記述が統合された結果のみ記すことにする。なお、CONT 素性はここでの議論に直接的に関与しないので、原著でも省略してある。

$$(22) \left[\begin{array}{l} pl-wd \ \& \ DONNER \ \& \ 3sg-pres-indic-vb \\ MORPH \ \left[\begin{array}{l} FORM \ \ donne \\ I-FORM \ \ donne \end{array} \right] \\ SS|LOC|CAT \ \left[\begin{array}{l} HEAD \ \left[\begin{array}{l} verb \\ VFORM \ \ indic \end{array} \right] \\ VAL \ \left[\begin{array}{l} SUBJ \ \langle \textcircled{1} \rangle \\ COMPS \ \langle \textcircled{2}, \textcircled{3} \rangle \end{array} \right] \\ ARG-ST \ \langle \textcircled{1}NP[3sg], \textcircled{2}NP[acc], \textcircled{3}NP[\grave{a}_1] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$(23) \left[\begin{array}{l} ns-cl-wd \ \& \ DONNER \ \& \ 3sg-fut-indic-vb \\ MORPH \ \left[\begin{array}{l} FORM \ \ lui-donnera \\ I-FORM \ \ donnera \end{array} \right] \\ SS|LOC|CAT \ \left[\begin{array}{l} HEAD \ \left[\begin{array}{l} verb \\ VFORM \ \ indic \end{array} \right] \\ VAL \ \left[\begin{array}{l} SUBJ \ \langle \textcircled{1} \rangle \\ COMPS \ \langle \textcircled{2} \rangle \end{array} \right] \\ ARG-ST \ \langle \textcircled{1}NP[3sg], \textcircled{2}NP[acc], NP[p-aff, \grave{a}_1, 3sg] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$(24) \left[\begin{array}{l} ns-cl-wd \ \& \ DONNER \ \& \ 3sg-impf-indic-vb \\ MORPH \ \left[\begin{array}{l} FORM \ \ les-donnait \\ I-FORM \ \ donnait \end{array} \right] \\ SS|LOC|CAT \ \left[\begin{array}{l} HEAD \ \left[\begin{array}{l} verb \\ VFORM \ \ indic \end{array} \right] \\ VAL \ \left[\begin{array}{l} SUBJ \ \langle \textcircled{1} \rangle \\ COMPS \ \langle \textcircled{3} \rangle \end{array} \right] \\ ARG-ST \ \langle \textcircled{1}NP[3sg], NP[p-aff, acc, 3pl], \textcircled{3}NP[\grave{a}_1] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(22) は語彙素 DONNER と「直説法現在 3 人称単数」制約および *pl-wd* を統合したものである。LAVER と異なり DONNER は補語を 2 つとる。②で示された対格 (*accusative*) の NP と、③で示された \dot{a}_1 タイプの与格 NP である¹¹⁾。ここでは接辞として具現化する項がないため、すべての項が SUBJ リストと COMPS リストに記載されている。(23) は DONNER と「直説法単純未来 3 人称単数」制約および *ns-cl-wd* を統合したものである。 \dot{a}_1 タイプの NP 補語が接辞化されており、そのためこの NP は COMPS リストの要素になっていない。(24) は DONNER と「直説法半過去 3 人称単数」制約および *ns-cl-wd* を統合したものである。対格の NP が接辞化されており、COMPS リストには入っていない。

3.5 まとめ

以上で Miller & Sag (1997) が提案する語彙主義的接辞処理の概要は示すことができたと考える。これ以外にも、再帰代名詞、中性代名詞の *y* や *en*、あるいは成句的な *en vouloir à* などの接辞化も論じられているが割愛する。

次節では、同様のアイデアが冒頭で指摘した様々なデータの分析にも有効かどうか検討する。

4. 複合述語

本稿の冒頭で触れた (7) ~ (9) の例は、接辞が、項となる述語には前置せず、その述語の前の動詞に前置するという共通点があった。そしてこのような分布を (3) のような素朴な一般化では予測できないことを指摘したが、それでは Miller & Sag (1997) はどのようにこの問題を処理するのだろうか。

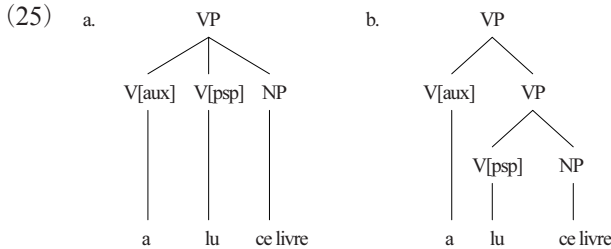
以下では、まず (7) のような複合過去の処理、次いで (8) のような

11) ③は PP ではなく、NP として扱う。また、2 種類の \dot{a} を区別し、与格 (接辞 *lui* などに対応するもの) を \dot{a}_1 とし、場所格 (接辞 *y* に対応するもの) を \dot{a}_2 とする。

être+ 属詞構文の処理を概観する¹²⁾。いずれも、接辞をとる動詞が後続する述語を補語とし、さらにはその述語の補語も継承する、と分析する点で共通している。そして最後に、複合過去の制約と、属詞をとる être の制約を統合することで、Miller & Sag (1997) では明示的に論じられていない分布が正しく予測できることを示し、2つの制約の正当性を裏付けることを試みる。

4.1 時制助動詞

複合過去の文 (7a) Pierre a lu ce livre において、助動詞 V[aux]、過去分詞 V[psp]、補語 NP の構造的関係を分析すると、アプリアリには少なくとも2つの可能性¹³⁾が想定できる。



(25a) は平板構造である。助動詞と過去分詞、および過去分詞の補語がいわば対等な形で関連し合っている。(25b) は階層構造である。まず過去分詞とその補語が VP を構成し、この VP を助動詞が補語としている。

英語の完了形の分析の多くは (25b) のような構造を前提としている¹⁴⁾。またそのような分析を無批判にフランス語にあてはめた研究¹⁵⁾も少なから

12) (9) のような使役動詞 faire については、それ自体非常に複雑な問題を提起するので稿を改めて論じたい。なお、フランス語の使役構文を HPSG の枠組みで論じた研究には、Abeillé, Godard & Miller (1997) などがある。

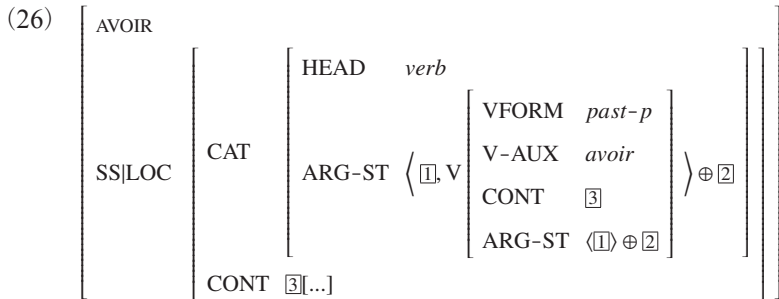
13) Abeillé & Godard (1994) (1996) (2002) は第3の可能性として、助動詞と過去分詞が一体化して複合体をなすケースも論じている。

14) Abeillé & Godard (1994) によると、Gazdard et al. (1982) などが該当する。

15) Abeillé & Godard (1994) の指摘するのは Pollock (1998)、Manning (1992)

ず存在する中で、Abeillé & Godard (1994) (1996) (2002) は多くの論拠をあげて (25a) のような平板構造の正当性を主張した。Miller & Sag (1997) も平板構造を前提に議論を進めている。

では、(25a) のような平板構造を前提にしながら、複合過去における接辞化の問題を解決するためには、助動詞の語彙素記述はどうあるべきだろうか。Miller & Sag (1997) は助動詞 AVOIR に関して¹⁶⁾ 以下のような記述を提案する。



ARG-ST に注目しよう。まず2つの項 $\textcircled{1}$ と \textit{V} を要素とするリストがあり、それと任意のリスト $\textcircled{2}$ が結合して全体的な項構造をなしている。

\textit{V} の素性構造記述に目を転じると、まず VFORM 素性の値が *past-p* (*past participle*) であることから、この動詞の形態は過去分詞形であることがわかる。また、この動詞がとる助動詞のタイプを指定する素性 V-AUX の値は *avoir* である (もし助動詞として *être* を要求するのであれば [V-AUX *être*] となる)。この動詞の意味情報は $\textcircled{3}$ と略記されている。そしてこの動詞の ARG-ST は、 $\textcircled{1}$ を要素とするリストと任意のリスト $\textcircled{2}$ を結合したものとなっている。

などである。

16) 助動詞ではなく、「持つ」「所有する」といった語彙的意味を持つ *avoir* (*J'ai un appartement à Paris*) には別の語彙素記述が可能である、という考え方が示唆されている。

ここで重要なのが、タグを用いた同一性の記述である。AVOIR の ARG-ST の①と②は、AVOIR の項である V（過去分詞）の ARG-ST の①および②と同一である。また、V（過去分詞）の意味情報と AVOIR の意味情報の同一性は③によって保証されている。

項構造に関する部分をもう一度まとめてみよう。

- ・ AVOIR の項は①、V（過去分詞）、②である。
- ・ ①は V（過去分詞）の主語、②はその補語に対応する。
- ・ AVOIR と V（過去分詞）は、主語①と補語②を共有する。換言すると、①は V（過去分詞）の主語であると同時に AVOIR の主語であり、②は V（過去分詞）の補語であると同時に AVOIR の補語でもある。

AVOIR と V（過去分詞）は項を「共有」している。あるいは前者が後者の項を「継承」と言い換えてもよい。このような関係が、上記の平板構造をうまく表示していると言える。

V（過去分詞）の取り得る補語の数や性質の違いに応じて、AVOIR の ARG-ST も多様に変化する。例えば以下のような可能性が考えられる。

- (27)
- a.
$$\left[\text{ARG-ST} \left\langle \underline{1}, \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ \text{VFORM } \textit{past-p} \\ \text{ARG-ST} \langle \underline{1}, \underline{2} \rangle \end{array} \right], \underline{2}\text{NP}[\textit{acc}] \right\rangle \right]$$
- b.
$$\left[\text{ARG-ST} \left\langle \underline{1}, \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ \text{VFORM } \textit{past-p} \\ \text{ARG-ST} \langle \underline{1}, \underline{2}, \underline{3} \rangle \end{array} \right], \underline{2}\text{NP}[\textit{acc}], \underline{3}\text{NP}[\textit{à}_1] \right\rangle \right]$$
- c.
$$\left[\text{ARG-ST} \left\langle \underline{1}, \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ \text{VFORM } \textit{past-p} \\ \text{ARG-ST} \langle \underline{1}, \underline{2} \rangle \end{array} \right], \underline{2}\text{NP}[\textit{de}_1] \right\rangle \right]$$

(27a) は補語に対格 NP の②を 1 つだけとるケース、(27b) は補語を 2 つとるケース (対格 NP の②と与格 NP の③)、(27c) は前置詞 *de* によって導入される NP 補語¹⁷⁾を 1 つとるケースにそれぞれ対応する。

複合過去において助動詞・過去分詞・補語が平板構造をなすという分析を反映した助動詞 AVOIR の語彙素記述は以上の通りである。それでは、過去分詞の補語の接辞化はどのように記述されるのであろうか。助動詞 AVOIR の語彙素記述に制約が課されると以下ようになる。

17) 前置詞 *de* は de_1 と de_2 に区別される。関係節化した場合、前者は *dont* に対応し、後者は *d'ou* に対応する。

(28)

		<i>ns-cl-wd & AVOIR & 3sg-pres-indic-vb</i>	
MORPH	FORM	<i>l'a</i>	
SS LOC	CAT	VAL	HEAD [V-AUX <i>avoir</i>]
			SUBJ < [1]NP[3sg] >
			COMPS < [2]V
			ARG-ST < [1], [2], [3]NP[p-aff, acc] >
			VFORM <i>past-p</i> V-AUX <i>avoir</i> CONT [4] ARG-ST < [1], [3] >
			CONT [4][...]

(29)

		<i>ns-cl-wd & AVOIR & 3sg-pres-indic-vb</i>	
MORPH	FORM	<i>lui-a</i>	
SS LOC	CAT	VAL	HEAD [V-AUX <i>avoir</i>]
			SUBJ < [1]NP[3sg] >
			COMPS < [2]V
			ARG-ST < [1], [2], [3]NP[acc], [4]NP[p-aff, à ₁] >
			VFORM <i>past-p</i> V-AUX <i>avoir</i> CONT [5] ARG-ST < [1], [3], [4] >
			CONT [5][...]

(30)

		<i>ns-cl-wd & AVOIR & 3sg-pres-indic-vb</i>	
MORPH	FORM	<i>le-lui-a</i>	
SS LOC	CAT	VAL	HEAD [V-AUX <i>avoir</i>]
			SUBJ < [1]NP[3sg] >
			COMPS < [2]V
			ARG-ST < [1], [2], [3]NP[p-aff, acc], [4]NP[p-aff, à ₁] >
			VFORM <i>past-p</i> V-AUX <i>avoir</i> CONT [5] ARG-ST < [1], [3], [4] >
			CONT [5][...]

まず (28) では、ARG-ST リストに3つの要素①、②、③が含まれている。①は主語に対応する項である。この項は接辞化されないため、SUBJ リストの要素にもなっている。②は過去分詞形の動詞補語である。この項は COMPS リストに含まれている。③は対格の NP 補語である。この項は接辞化されるため、COMPS リストには含まれていない。COMPS リストの要素②を詳しく見てみると、その ARG-ST に①と③が含まれていることがわかる。つまり、過去分詞形の動詞②の主語①と補語③が、AVOIR の主語①と補語③と同一であることが保証されている。一方 (29) では、接辞化されない補語が1つ残されている点に興味深い。まず ARG-ST リストには4つの要素①、②、③、④が含まれている。①と②は (28) と全く同じである。③は対格の NP 補語で、接辞化されないため COMPS リストにも含まれている。④は与格の NP 補語で、接辞化されるため COMPS リストには含まれていない。過去分詞形の動詞②の素性構造は COMPS リスト内で詳しく記述されており、①、③、④を AVOIR と共有していることがわかる。(30) は2つの補語が接辞化されるケースに対応する。(29) と同様、ARG-ST に4つの要素①、②、③、④が含まれている。①と②は (28) および (29) と全く同じである。③は対格の NP 補語、④は与格の NP 補語であるが、ここでは両方とも接辞化され、COMPS リストから削除されている。また②の ARG-ST は (29) と同じである。以上のすべてのケースで、V (過去分詞) の補語が AVOIR に継承され、接辞化される場合は AVOIR に前置し、接辞化されない場合は V (過去分詞) の補語として具現化する、というプロセスを正しく表示していることが確認できる。

この節の締めくくりとして、冒頭で触れた問題についてコメントしておこう。(7a) *Pierre a lu ce livre* の補語 *ce livre* を接辞化する場合、接辞を助動詞の前に置いた (7b) *Pierre l'a lu* は適格であるが、過去分詞の前に置いた (7c) **Pierre a le lu* は不適格であるというデータを確認した。接辞のこのような分布を、ここまで見てきた理論装置によって予測することは可能だろうか。ここで重要になってくるのが、(17) で見た *cl-wd* 制約の関数 F_{PRAF} である。(18) で詳述したように、この関数は I-FORM の値と VFORM の値

を入力すると、接辞を含む適切な動詞の形態を出力するものであった。そして (18a) が示すように、[VFOR *past-p*] を入力すると出力されるのは I-FORM そのものであった。これは「過去分詞は接辞を付加されない」ということを意味する。そして (28) (29) (30) のように *ns-cl-wd* 制約が課される場合でも、あるいは (例はあげていないが) *su-cl-wd* 制約が課される場合でも、いずれの制約も *cl-wd* の下位タイプであるので、その素性構造は全て継承され、関数 F_{PRAF} も当然のことながら継承される。このようにして、接辞が過去分詞の前に位置する (7c) のような文は不適格として排除されることになるのである。

4.2 属詞

属詞構文の処理も、基本的アイデアは複合過去の場合と同じである。つまり être と属詞が属詞の補語を「共有する」、あるいは être が属詞の補語を「継承する」と仮定し、そのプロセスを制約化するのである。

フランス語の伝統文法で「属詞」(attribut) と呼ばれる機能を持つのは、être の補語となる AP、NP、PP などである。また Abeillé & Godard (1996) (2002) が指摘するように、受動文の過去分詞 VP も同様の分析が可能である。これらを一括して XP と表記すると、ÊTRE の語彙素記述¹⁸⁾は以下のように仮定される。

$$(31) \left[\begin{array}{c} \text{ÊTRE/RESTER} \\ \left[\begin{array}{c} \text{SS|LOC} \\ \text{CAT} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{ARG-ST} \left\langle \left[\begin{array}{c} \text{XP} \\ \text{PRD} + \\ \text{SUBJ} \langle \square \rangle \end{array} \right] \right\rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$

PRD 素性とは、「述語」(predicate) になり得るかどうかを指定するもので

18) rester も同様の属詞構文になりうるので、語彙素記述を一括し、ÊTRE / RESTER と表記してある。

あり、上記 XP はすべてその値が+である。さて、ここで注目すべきは、ARG-ST リスト内に2つの要素①と XP が含まれ、前者が XP の SUBJ リストの要素にもなっている点である。すなわち、この記述によって、XP の主語と ÊTRE（または RESTER）の主語が同一であることが保証されている。

être に後続する補語がさらに独自の補語をとる場合、以下のように記述される。

$$(32) \left[\begin{array}{c} \text{ÊTRE / RESTER} \\ \text{SS|LOC} \left[\begin{array}{c} \text{CAT} \left[\text{ARG-ST} \left\langle \text{①}, \left[\begin{array}{c} \text{X} \\ \text{PRD} \quad + \\ \text{ARG-ST} \langle \text{①} \rangle \oplus \text{②} \end{array} \right] \right\rangle \oplus \text{②} \end{array} \right] \right] \end{array} \right] \right]$$

(31) と比べると、(32) ではまず動詞の補語が XP ではなく単なる X となっている。また、動詞と補語 X が①を共有している点は (31) と同じであるが、(32) では X の補語である②が動詞の ARG-ST リストにも付け加えられ、補語の共有も保証されている。

動詞の語彙素が適切な形で記述できれば、接辞化の問題は簡単に解決する。(8a) Pierre est fidèle à Marie の à Marie を接辞化すると (8b) Pierre lui est fidèle となるが、lui est fidèle の部分は以下のように記述できる¹⁹⁾。

$$(33) \begin{array}{c} \text{VP} \\ \swarrow \quad \searrow \\ \text{V} \qquad \qquad \text{A} \\ \left[\begin{array}{c} \text{FORM} \quad \textit{lui-est} \\ \text{SUBJ} \quad \langle \text{①} \rangle \\ \text{COMPS} \quad \langle \text{②} \rangle \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \text{①}, \text{②}, \text{③} \rangle \text{NP}[p\text{-aff}, \grave{a}_1, 3\text{sg}] \end{array} \right] \quad \text{②} \quad \left[\begin{array}{c} \text{FORM} \quad \textit{fidèle} \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \text{①}, \text{③} \rangle \end{array} \right] \end{array}$$

19) Miller & Sag (1997, p.605) の (58) を一部修正したものである。

この記述によって、(8c) *Pierre est lui fidèle が不適格な文として排除されることも予測される。

4.3 さらなる複合

ここまでは、観察データを出発点に、それをどのように分析し記述するかという方向で議論が進んできた。つまり「現実から理論へ」という方向である。本稿を締めくくるこの最後の節では、議論の方向を逆転し、「理論から現実へ」という観点から1つの問題を検討してみたい。その結果、Miller & Sag (1997) が明示的な形では指摘していない事実に触れることができると考える。

ここまでに導入された素性構造記述を以下のように組み合わせるとどうなるだろうか。

- ・ AVOIR → 直説法現在 3 人称単数
- ・ ÊTRE → 過去分詞
- ・ fidèle à Marie → à Marie を接辞化

今までの議論（とりわけ (29) や (33)）を総合すると、以下のような記述が帰結するはずである。

$$(34) \left[\begin{array}{l} \text{SUBJ} \quad \langle \textcircled{1} \rangle \\ \\ \text{COMPS} \quad \left\langle \begin{array}{l} \text{V} \\ \text{VFORM} \quad \textit{past-p} \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \textcircled{1}, \textcircled{3}, \textcircled{4} \rangle \end{array} \right\rangle, \begin{array}{l} \text{A} \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \textcircled{1}, \textcircled{4} \rangle \end{array} \right] \\ \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \textcircled{1}, \textcircled{2}, \textcircled{3}, \textcircled{4} \text{NP}[p\text{-}aff, \grave{a}_1, 3sg] \rangle \end{array} \right]$$

ここでは、 $\textcircled{2}$ が過去分詞の *été*、 $\textcircled{3}$ が *fidèle*、 $\textcircled{4}$ が *lui*（接辞化された *à Marie*）にそれぞれ対応する。

(34) によって予測される語列は、*lui-a-été-fidèle* である。また、**a-lui-été-fidèle* や **a-été-lui-fidèle* は不適格なものとして排除される。そしてい

れも現実に正しく対応していることが確認できる。

5. 結語

以上で Miller & Sag (1997) の提案する語彙主義的観点からの接辞化分析の概要は示すことができたはずである。また、4.3 節では、著者らが指摘していない問題も処理できることを示した。Miller & Sag (1997) はこれ以外にも、en vouloir à のような表現における接辞化の問題、使役動詞 faire と接辞の組み合わせ、「抽出」(extraction) と接辞化の並行関係などを詳しく論じており、理論としての整合性が高まっていると言える。しかしその一方で、Sportiche (1996) が「移動」にもとづく分析を正当化する根拠としてあげている多彩なデータをすべて論じ尽くしているわけではない。語彙主義の卓越性を主張するためには、そのようなデータをどのように処理するか示す必要があるだろう。

参考文献

- Abeillé, Anne. 1993. *Les nouvelles syntaxes*. Paris : Armand Colin.
- Abeillé, Anne. 2008. Tout ça, quoi. Remarques sur les mots « légers » en français. In Dan Van Raemdonck (dir.), avec la collaboration de Katja Plog, *Modèles syntaxiques. La syntaxe à l'aube du XXI^e siècle*. Bruxelles : Peter Lang.
- Abeillé, Anne & Danièle Godard. 1994. The Complementation of Tense Auxiliaries in French. *West Coast Conference on Formal Linguistics* 13, 157–172.
- Abeillé, Anne & Danièle Godard. 1996. La complémentation des auxiliaires français. *Langages* 122, 32–61.
- Abeillé, Anne & Danièle Godard. 2002. The Syntactic Structure of French Auxiliaries. *Language* 78(3), 404–452.
- Abeillé, Anne, Danièle Godard & Philip Miller. 1997. Les causatives en français : un cas de compétition syntaxique. *Langages* 115, 62–74.

- Abeillé, Anne, Danièle Godard & Ivan A. Sag. 1998. Two Kinds of Composition in Feanch Complex Predicates. In Erhard Hinrichs, Andreas Kathol, Tsuneko Nakazawa (eds.), *Syntax and Semantics 30 : Complex Predicates in Nonderivational Syntax*, 1–41. New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam. 1955. *The Logical Structure of Linguistic Theory*. Unpublished manuscript. MIT. [Published in 1975 by Plenum Publishers]
- Gazdar, Gerald, Geoffrey K. Pullum & Ivan Sag, 1982. Auxiliaries and Related Phenomena in a Restrictive Theory of Grammar. *Language* 58, 591–638.
- Ginzburg, Jonathan & Ivan A. Sag. 2000. *Interrogative Investigations*. Stanford: CSLI Publications.
- Manning, Christopher D. 1992. Romance is so Complex. *Technical report no. CSLI-92-168*. Stanford: CSLI Publications.
- Miller, Philip H. & Ivan A. Sag. 1995. Une analyse lexicaliste des affixes pronominaux en français. *Revue québécoise de linguistique* 24(1), 135–171.
- Miller, Philip H. & Ivan A. Sag. 1997. French clitic movement without clitics or movement. *Natural Language & Linguistic Theory* 15(3), 573–639.
- Pollard, Carl & Ivan A. Sag. 1987. *Information-Based Syntax and Semantics, Volume I : Fundamentals*. Stanford: CSLI Publications. (邦訳：郡司隆男訳『HPSG 入門—制約にもとづく統語論と意味論』産業図書 1994)
- Pollard, Carl & Ivan A. Sag. 1994. *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. Stanford: CSLI Publications.
- Pollock, Jean-Yves. 1989. Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20(3), 365–424.
- Sag, Ivan A., Thomas Wasow & Emily M. Bender. 2003. *Syntactic Theory. A Formal Introduction*. Second Edition. Stanford: CSLI Publications. (初版 邦訳：郡司隆男・原田康也訳『統語論入門—形式的アプローチ』(上)(下) 岩波書店 2001)

Sportiche, Dominique. 1996. Clitic Constructions. In Johan Rooryck, Laurie Zaring (eds.), *Phrase Structure and The Lexicon*, 213–276. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.